

平成 19 年度卒業論文

建築意匠設計における建築雑誌の役割に関する研究

—建築専門雑誌の作品写真から読み取れる年代特質分析—

指導教員

坂牛 卓

信州大学工学部社会開発工学科

坂牛研究室

04T3034K 工藤洋子

目次

1 章 序

- 1.1 研究の背景
- 1.2 研究の目的と意義
- 1.3 研究対象
- 1.4 新建築の歴史と特質
- 1.5 既往研究

2 章 建築写真について

- 2.1 写真と建築
- 2.2 写真の知覚の変容
- 2.3 建築写真の知覚の変容

3 章 分析・考察

概要

- 3.2 写真サイズ
 - 3.2.1 分析方法・結果
 - 3.2.2 考察

3.3 フレーミング

3.3.1 分析方法・結果

3.3.2 考察

3.4 写真サイズとフレーミング による年代分析

3.4.1 分析方法

3.4.2 結果・考察

3.5 建築用途別比較

3.5.1 対象

3.5.2 『新建築』における建築用途分類と「生活基本調査」 における生活行動分類

3.5.3 分析・考察

4章 結

参考文献

謝辞

データシート

梗概

序章

- 1.1 研究の背景
- 1.2 研究の目的と意義
- 1.3 研究対象
- 1.4 新建築の歴史と特質
- 1.5 既往研究

1.1 研究の背景

私たちは建築を知るとき、足掛かりとして写真や図面や文章などで伝達される“情報としての建築”を目にすることが多く、初見として実際の建築を見ることはとても少ない。建築は絵画や彫刻のように現物を移動させることができるものとは違い、現地を訪れない限り実物を見られないために何らかのメディアを通じて情報を得るしかできない。その結果、建築メディアは強化され、現在そのメディアのない建築の世界が想像できないくらい両者が切り離せない関係にあるⁱ。

そのような建築の第一印象を与えることの多い情報としての建築はまた建築を考える際に影響を与える要素を持っている。19世紀中ごろのイギリス建築が粗悪なディテールでフランス建築が繊細なディテールを持っていたのは印刷技術による結果であると言われるように、写真技術による建築への影響は重要なものと位置づけることができる。そのような情報そのものの技術発展の変化だけではなく、写真そのものの表す意味合いの変化も建築に大きな影響を与えている。写真は記録性としての役割から、メディアという社会的な役割の一員を担うようになる。建築同様、メディアと深く関係を持つファッション産業の構造について成実弘至は消費者と生産者との相互作用を指摘するⁱⁱ。

ファッションは実際にそれを着る消費者と流行を仕掛ける作り手や売り手との相互作用から生まれてくるわけである。[…中略…]ファッションとはこのダイナミックな相互作用から生じる現象なのである。(成実弘至 2003 213)

つまり、ファッションは販売者が消費者に選ばれることを考慮しながらメディアを利用し流行を築き上げ、また多くの消費者はメディアの情報や流行に翻弄されながら価値観を築き上げるというようなダイナミックな相互作用から生じる現象であると言及をしている。

建築におけるメディアという場も、建築設計者と使用者によるダイナミックな相互作用の発生する場であると考えられる。そこで建築を伝える媒体に着目し、それらの変化を通じて建築様式の変化を明らかにし、建築意匠設計の構造の一端をみる。

1.2 研究の目的と意義

そこで本研究では建築専門雑誌内にある写真から年代比較をすることを通じて、建築専門誌の情報伝達の特徴を明確することを目的とし、それによって建築意匠設計の構造の一端を明らかにすることに意義がある。

1.3 研究対象

建築専門雑誌は新しい建築を目にすることのできるメディアであり、時には古い情報を探し出す為にも使われる。それらは主に写真・図面・文章から構成され、中でも写真は空間や形態を視覚的な情報として伝える要素である。建築写真は大きさや枚数によって印象や着目視点を変化させる。そこで本研究は写真の枚数とサイズ、また対象構図を分析対象とする。

『新建築』という現在発行中の建築専門雑誌で最も古くから刊行されている雑誌内の「特集ページ」という読者の注目を考慮しながら、設計者や編集者や広告側など多様な意図が反映する部分を選択する。そして建築様式の変化との相互関係に着目できるよう、現在の建築様式と隣り合うポスト・モダニズムが始まったⁱⁱⁱとされる 1975 年から 2004 年までの 30 年間を対象期間とする。それらを以下の手順に従い分析・考察を行う。

その結果、81 件の特集を対象として抜き出す。その中に掲載されている対象写真数は 9080 枚となった。以下の表に掲載年、掲載号、特集タイトル、掲載ページ数、掲載写真数を示す。

年	号	特集タイトル	ページ	写真
1974	7402	住宅特集	104	160
	7408	住宅特集	104	162
1975	7502	住宅特集	102	156
	7503	集合住宅特集	78	123
	7509	沖縄国際海洋博覧会・沖縄の建築	117	331
1976	7603	集合住宅特集	68	115
	7605	丹下健三・都市・建築設計研究所 1970年代作品	100	70
	7609	住宅特集	149	215
1977	7703	集合住宅・山荘特集	109	153
	7708	住宅特集	132	243
	7709	東京駅を考えよう！	27	20
1978	7802	住宅特集	144	190
	7807	集合住宅特集	67	120
	7808	住宅特集	128	193
	7810	集合住宅特集	48	92
1979	7901	丹下健三・都市・建築設計研究所 1970年代後半の作品	118	97
	7902	住宅特集	148	230
	7907	斜面の構築	39	45
	7908	住宅特集	136	216
1980	8004	風土と建築	89	99
	8008	住宅に見る建築家と社会の構図	154	279
1981	8104	いま、住宅の課題は？	112	148
	8107	和風建築5題	56	83
	8108	住宅特集	165	239
	8109	コミュニティ建築	46	79
1982	8202	住宅特集	149	263
	8208	住宅特集	156	289
1983	8302	住宅特集	156	272

年	号	特集タイトル	ページ	写真
	8303	イメージの継承	122	241
	8306	<日本のなかのアメリカ アメリカのなかの日本>	68	115
	8308	住宅特集<構造素材再考>	157	312
1984	8402	住宅特集	158	280
	8407	アンケートに見る<建築の近未来>	33	50
1985	8505	国際科学技術博覧会	89	229
1986	8605	東京都新都庁舎指名設計競技結果発表	25	19
	8607	第二国立劇場(仮称)設計競技入賞者発表	16	35
1987	8708	リゾート施設	113	246
1988	8806	なら・シルクロード博	25	63
	8812	スモール・ビル 10 題	56	89
1989	8902	関西国際空港旅客ターミナルビル設計競技	23	28
	8905	街づくりとしての博覧会 横浜博覧会・アジア太平洋博覧会ー 福岡'89	52	162
	8907	丹下健三の近作	52	77
	8909	アトリエ派の世界風景	79	127
1990	9005	国際花と緑の博覧会	68	128
	9010	ハイタッチ・リサーチパーク	36	56
	9011	野武士以降	89	155
1991	9105	東京都新庁舎	89	80
1992	9204	槇文彦／最近の5つの海外プロジェクト	25	39
	9206	ヒルズサイドテラス	32	58
1994	9402	REVIEW' 98	26	53
	9408	関西国際空港旅客ターミナルビル	36	34
1995	9512	震災 300 日	24	46
1996	9608	東京国際フォーラム	55	68
	9612	木の空間 1996	95	153
1997	9701	長野 1998	22	31

年	号	特集タイトル	ページ	写真
	9712	高齢社会のためのデザイン	48	98
2000	0004	集住の可能性	45	51
	0006	システム的な思考と建築	27	35
	0008	小さな公共建築	33	30
	0009	宮崎浩／プランアソシエイツの最近作から	32	40
	0010	オフィスはどこに向かうのか	49	43
	0011	XLの対極で	32	24
2001	0103	近代を超える「もうひとつの空間」	42	39
	0104	特徴的な素材で空間をつくる	54	69
	0104	建築家の活動拠点をつくる	32	42
	0105	開かれる教育空間	68	70
	0108	環境負荷を低減する	18	64
	0110	変容する都市—21世紀に入った東京を俯瞰する	20	20
	0112	上海	16	40
	0112	多様化・多機能化する学校	38	66
2002	0201	再生のデザイン	47	36
	0202	建築のリニューアル	65	40
	0202	医療福祉施設の現場から	30	99
	0205	集合住宅／その供給形式とデザインの在所	55	84
	0207	ワークショップと建築家の役割	54	56
	0210	丸の内再構築	24	29
2003	0302	木質空間	115	164
	0306	学校建築	72	70
	0309	集合住宅は変わるか	63	96
2004	0406	浜中湖花博 栗生明チームの仕事	18	26
	0409	アルミニウム構造がもたらす 建築の可能性	18	38

1.4 新建築の歴史と特質

新建築は新建築社出版の建築専門誌で1925年に創刊され、現在発刊中の建築専門誌では最も早くに創刊された雑誌である。創刊当初は、「住」に関する諸問題を扱っていかこうとするものであった。その後、その範囲を広げていき、多くの企画が紙面を飾るようになる。その後、第二次世界大戦のあおりを受けて1945年に休刊し、翌年の1946年に復刊される。1953年に川添登が編集長になってからは、建築の批評などの建築ジャーナリズムの確立に向かって紙面作りを進めた。しかし、1957年に川添が新建築を去ったことにより、編集方針が変わり、「記録に徹する」という体制を維持し、現在に至る。^{iv}また、1985年には新建築の姉妹誌として、季刊の新建築住宅特集が創刊され、1986年5月に月刊誌となり、現在は表題に“j t”を加え、住宅建築の専門誌として扱われている^v。

また、新建築社代表取締役社長（当時）の吉田義男は新建築誌の理念を「建築専門雑誌の編集者は、常に建築という分野における学問、作品、芸術などの意義、価値を見出し、取材、編集、印刷、出版という創作を通じて記録にとどめることにある」として、その記録性を強調した^{vi}。

1.5 既往研究

建築のメディアについて扱われている研究は、視覚的な要素としての写真に関する研究と論理的な要素としての言説に関する研究の2種類があげられる。それらはさらに設計者や建築物を限定して研究されているもの、建築雑誌など媒体を限定し研究されているものの二分にすることができる。前者の設計者を限定する例として、ル・コルビュジエの作品集における写真を取り上げ、発表写真とその組み合わせや大きさの相対的な関係による写真の構成を検討し、情報化された建築空間の構成のあり方の一端を明らかにしようというものがあげられる^{vii}。それからは設計者であるル・コルビュジエの建築表現の特徴を考察するという特定した視点が含まれている。後者の例では建築雑誌の掲載写真に関する研究として、建築誌および住宅誌に掲載された住宅作品のスチール写真を取り上げ、両誌比較からその差異を抽出することにより建築のイメージ形成にかかわる枠組みの一端を明らかにすることを目的としているもの^{viii}、建築誌上の住宅の写真表現に着目し、年代別の比較検討より建築写真と建築の関係性を把握することを目的としているもの^{ix}、建築専門誌と一般誌の作品写真の比較によって建築一般誌の情報伝達の特質を考察することを目的とする研究などがあげられる。また、言説に関する研究で設計

者や建築物を限定しているものとしてル・コルビュジエの著作『建築をめざして』中に収められている言語に着目し、その言語の性格とル・コルビュジエの建築に関する言及に検討を加え、機械の隠喩に含まれている両義的な性格を明らかにしようとする研究^{xi}、媒体の言説を扱うものとしては建築誌に掲載された住宅作品の解説文を資料として言語による建築像の形成にかかわる枠組みの一端を明らかにすることを目的とする研究などがある。

2 章

建築写真について

2.1 写真と建築

2.2 写真の知覚の変容

2.3 建築写真の知覚の変容

2.1 写真と建築

史上初の写真像とは、J. N. ニエプスがカメラ・オブスキュラの像を直接版面に起こす試みによりできたものであった。それは、窓からの光景をおぼろげに写した像をアスファルトの感熱変化の応用により固定させることに成功したものである（図1）。長い時間の露光時間を要する為に、窓から写ったその景色とは納屋と鳩舎であった。その手法から発展してゆくダグレオタイプとは別の手法としてタルボットの開発したカロタイプというものがある。そちらの最初期の写真にも格子窓が映し出されている（図2）。



図1 《作業所からの眺め》

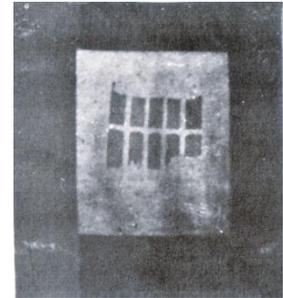


図2 《格子窓》
(10+1 2001年 No.23 p.83)

写真は撮る対象として建築を必要とし、建築もまた写真に撮られることによってはじめて建築たりうる。そんな「共犯関係」を通じて、建築写真は生み出されてきた。(磯達雄 2001 p.77)

写真の誕生から建築はその不動さ故にすでに主要なモチーフのひとつとされ、建築もまた写真の構造をうまく利用して写真という手法を取り込んでいく。そのような建築と写真の「共犯関係」は建築の範囲を広げることとなる。

建築写真はその撮影方法より、記録するものという認識が強く存在した。1851年、フランスの歴史的記念建造物委員会が古建築の状態の記録のために利用するとして、設立間もない写真製版教会へ建築の写真撮影を依頼した。誕生して間もない写真術は建築の記録手段となり^{xii}、それは永遠に壊れないなどということのない建築を視覚的に保存するための手段であった。日本でも、文化財の記録として『特別保護建造物及国宝帖』の写真集が明治末に刊行された^{xiii}。

そのように記録として残された写真は建築界で伝達的手段へと変化してゆくこととなる。写真によって、実物まで足を運ばなくても情報として目にすることができるという特性が建築の新しいフィールドを築きあげたのである。写真が手軽に誰にでも見られるようになり、消費されるものとなると記録という扱われ方から情報要素という扱われ方がなされるようになる。

そのような写真の発展は建築に次々と影響を及ぼした。19世紀後半には建築雑誌に登場し、誌面の構成要素として扱われる。そして20世紀の建築写真は写真の氾濫に浸されることとなった^{xiv}。

2.2 写真の知覚の変容

カメラ・オブスキュラのメカニズムの定義から、写真の概念は対物レンズの向こうにあるものの記録ということにおのずと定義されてしまっていた^{xv}。しかし、カメラ・オブスキュラや像を固定させるための手段や方法など科学技術の発展により、写真を撮る手法・形態に変化が生じることとなった。さらに、それら写真を伝達する手段としての印刷技術などの発展によって写真の持つ対象物に対するひとつの情報的な価値が写真の新しい表現を切り開くこととなる^{xvi}。それは写真の持つ記号性の変化によるものがひとつの要因であるといえる。

記号とは何かを代替・代理したもの、表現、印のことを意味する。言語や絵画も記号のひとつであり、私たちは記号を通じてコミュニケーションをとる。写真はレンズの反対側にある現実に存在するものを代理して表現しているものであり、写真の場合には被写体は意味されるもの（シニフィエ）であり、写真そのものが意味するもの（シニフィアン）となる。写真の持つ記号性の変化とはシニフィアンの境遇の変化によるものである。

発祥初期に写真の持っていた「記録」という概念は、写真そのものから生じたものだけでなく利用者側によっても生じたものとされている^{xvii}。歴史記念物委員会が大規模な公的記録事業をとして写真を利用したことは写真の記録性と現実の歴史化の発端にあり、それが結果として写真は記録するものとしての社会的機能の役割を果たすものと定着することにつながる。^{xviii}

しかし科学技術発展により、その「記録性」は変化を遂げることになる。技術の発展が写真を社会に氾濫させる拍車を掛け、写真が社会的な機能をし始めると、それらは記録という受動的なものからメッセージを放つ能動的なものへと変化してゆく。

写真の記録性についてロラン・バルトは、

「写真」の場合は、事物がかつてそこにあったということを決して否定できない。そこには、現実のものでありかつ過去のものである、という切り離せない二重の措定がある。(ロラン・バルト 1985 p.93-94)

と述べ、写真は事後の記録であり、それは実際に存在していたものが写されていることが定義とされている。その定義は写真の被写体を見ている者に対しても、見ていない者に対しても同様に効果を発揮する。ロラン・バルトの述べるその「それはかつてあった」という写真の定義こそが写真のメッセージであることが考えられる。社会に氾濫した写真はそのようなメッセージを持つが故に出来事を生み出す仕組みとなる。写真によって事実が証明されるような事象は

写真が事実という出来事を生み出す仕掛けをなすことになる。その現象の進化を多木はこう述べる。

写真が事実を生産し、流通消費がなされ、出来事を媒介しさらにその媒介を再生産するようになると、出来事や物のありようの全体と写真の全体とが社会の中で関係し合う相は、出来事とその事後の記録という発生の前後関係だけによって理解されることはもはや困難である。(多木浩二、2003、p. 313)

社会的構造のなかで記号現象としての写真は「記録」という概念以上のメッセージを獲得したこととなる。

2.3 建築写真の知覚の変化

誕生した時から切り離すことのできない関係にあった写真と建築の関係は写真の知覚変化とともに変容してゆき、20世紀の近代建築へ大きな影響を及ぼした。写真の知覚の変化により、それまでの記録をする為としての建築写真は建築表現手法としての建築へと変化したからである。

建築表現方法として写真に対し特別な行為をもたらした建築家としてル・コルビュジエがあげられる。コルビュジエは「レスプリ・ヌーヴォー」や、彼自身の『全作品集』の中で写真に対し数々の修正を加えている。それは濡れていて不揃いに見える柱を灰色に塗りつぶすという行為やパーゴラを消去し地表の白い痕跡のみを残す行為、敷地を消去し建物だけを浮き立たせる行為や内観写真での柱を消去する行為などが挙げられる。コルビュジエは写真に修正を加えることで彼のイメージする「ピュリズム」の美学に近づくものを表現した。コルビュジエの考える実際の建築とマスメディアに載る建築との関係について、コロミーナは、

彼にとって建築とは、観念の純粋な領域で解決されるべきコンセプチュアルな問題だったのであり、それが建てられるや、現象する世界に混濁され、必然的に純粋性を失ってしまうものだったのだと、と。だが重要なことは、この同じ建てられた建築の一片が印刷物の二次元の空間に入り込んでくるや、今度はふたたび観念の領域に回帰していくことである。写真の機能とは、たまたま建てられた建築の鏡像として反映することではない。建設は建築の課程における重

要な瞬間だが、しかし決して最終成果品ではないのだ。写真とレイアウトがページの空間に、もう一つの建築を築き上げよう。概念化とその実行、そしてその複製は、伝統的な創造過程では別個で連続した時間だった。だがル・コルビュジエの錯綜した制作過程では、このヒエラルキーは失われてしまう。建てることの概念化とその複製＝再生産は、再度交錯するのである。

(ピアトリス・コロミーナ 1996 (松畑強 訳). p. 90-91)

と述べる。つまりコルビュジエは、実際に建てられた建築からマスメディア上にイメージを創造し、それらを構成することで創造される建築によって自らの作品の表現を行った。またコルビュジエは新聞やカタログやはがきなどの写真をなぞったスケッチを描き、また自身の設計した建築が竣工したずっと後になっても繰り返すスケッチを行うなど、写真を受動的に用いていた^{xix}。その行為からも、コルビュジエは写真を記録として認識しているのではなく、情報のひとつとして利用し、さらに写真内にある様々な情報を取捨選択して新しいイメージを作り上げるといふ手法を建築において実践していることがわかる。

また、ル・コルビュジエの写真に対する考え方とは異なる思考を持つ建築家としてアドルフ・ロースが挙げられる。彼は自身の設計する建築の写真写りが悪いことを誇りに思っていた。ロースは実在する永続的な物体につねに結びついている建築が言葉とドローイングと写真によって表現しきれものではないと思ひ、建築写真については、

写真が建築を何か (別のもの) にする、ニュースという品目に変えるということ…[中略]…そしてニュースという品目はそれが言及している事実と別とすれば、それ自身においてひとつの出来事なのであり、…[中略]…芸術品が日常品と違うように、建築もニュースとは違う。(ピアトリス・コロミーナ 1996 (松畑強 訳). p. 50)

と述べている。ロースはコルビュジエとは違い、写真から読み取れる建築は、設計意図が全て伝わるものではなくまったく別のものとして否定をしていた。

そして日本の現代建築においては、近代建築におけるメディアを戦略的に使用した代表と言えるル・コルビュジエや、アドルフ・ロースとはまた別の、新しい写真と建築の関係が誕生している。例の建築家の一人として西沢立衛が挙げられる。代表作の例としては「森山邸」や「ウィークエンドハウス」が挙げられる。前者は住戸が敷地の中にバラバラと建っていて、写真に撮ると敷地外にある家や電信柱が隙間から写り込んでしまう。従来のノイズをできるだけ避け

る建築写真の撮り方を倣うと上手く撮れないこの建築は外部との多様な関係を作るものというコンセプトでつくられている^{xx}。また後者の建築は外壁にほとんど窓が付いておらず、3つの光庭が挿入されている建築で、従来の窓の開け方とは異なり外部の自然を住宅の上部から入れ込むよう設計されている。これに対し五十嵐太郎は、

通常建築のように壁に穴をつくり、水平方向に映像を通過させるものをカメラ・オブスキュラだと定義すれば、これは異質なモデルである。(五十嵐太郎, 2001, p. 129)

と述べ、近代以降の建築を支配してきたカメラ・オブスキュラのモデルをずらし、壊そうとしているのではないかと考察している^{xxi}。2つの作品のコンセプトはまったく異なるものであるが、両者は違う方向性によって、建築写真の構造の変化のきっかけを与えている。

また、もう一人の建築家として青木淳が挙げられる。彼は作品「青森県立美術館」の作品集において写真家鈴木理策に写真を撮らせている。鈴木感覚によってとられる写真によって建築意図とは異なる見え方がなされた写真で構成される作品集から、青木自身がその建築の中で伝えたかったことを表現しているという^{xxii}。メディアを通ず表現ながらも、設計者の意図と観る者との間にもうひとつの視点を入れ込むという手法はコルビュジェの表現方法とは異なる手法と言える。そのように、設計者の意図を直接反映しない建築写真としてホンマタカシや本城直季などの写真家を起用することが現在では珍しいことではなくなった。建築写真は記録としての機能から、表現という機能を得てなお、範囲を広げつつあることがいえると考えられる。

3 章

分析・考察

3.1 概要

3.2 写真サイズ

3.3 フレーミング

3.4 写真サイズとフレーミング

による年代分析

3.5 建築用途別比較

1.6 概要

対象特集 81 特集に掲載されている写真枚数、総ページ数は 9,080 枚、5,781 ページであった。ページ数、写真枚数、各項目の 1 特集における平均数を表 1

	70年代	80年代	90年代	2000年代	計
特集数(特集)	19	24	14	24	81
ページ数(頁)	1918	2151	645	1067	5781
写真数(枚)	2931	3821	999	1329	9080
平均ページ数/特集(頁)	101	90	46	44	281
平均写真数/特集(枚)	154	159	71	55	112

表 1 年代別対象項目

にまとめる。特集数は 70 年代が 19 特集、

80 年代が 24 特集、90 年代が 14 特集、2000 年代が 24 特集である。また、1 特集あたりの平均ページ数/平均写真数は 70 年代から 101 頁/154 枚、90 頁/159 枚、46 頁/71 枚、44 頁/55 枚であり、90、2000 年代は 70、80 年代の約半分の値を示している。図 1 は各特集の総写真数と総ページ数についてのグラフである。

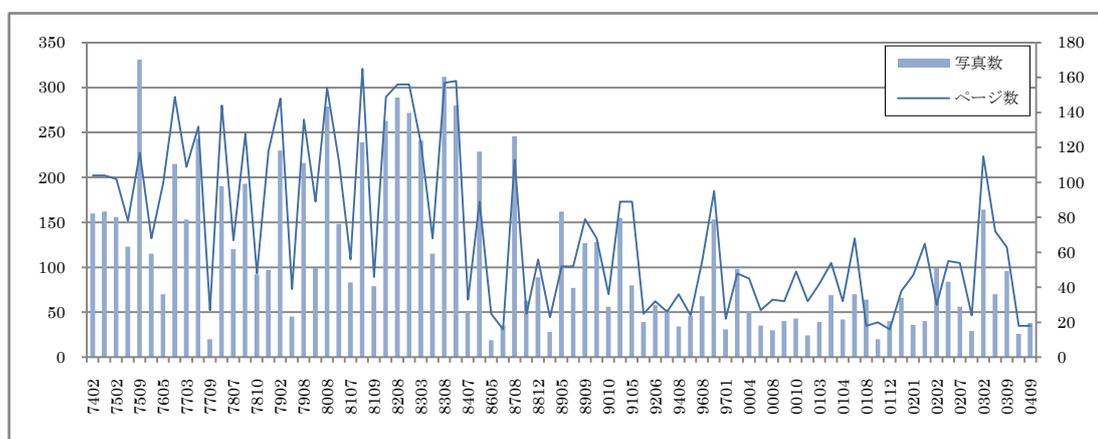


図 2 1 特集における写真数・ページ数

写真枚数が 100 枚以上である特集は 70 年代に 14/23 特集、80 年代 13/24 特集など半数以上を占めるのに対し 90、00 年代は数特集のみである。ページ数では 50 ページ以上で構成している特集は 70、80 年代においては半数以上を占めているのに対し 90、00 年代は数特集にとどまっている。

以上の表とグラフからは全体的に写真枚数・ページ数ともに減少傾向にあることが確認できる。また各年代について特集数、ページ数、写真数共に一律ではない。それらを比較できるようにするため、本論では年代毎の平均比率による考察を行う。

以下の分析ではこれらの項目を写真の大きさ、または写真に写る構図によって分類し考察をする。また、年代毎で見られる特徴との比較として建築用途毎における考察も行う。

1.7 写真サイズ

3.2.1 分析方法・結果

写真枚数やページ数の量差の要因の一つとして写真の大きさがあげられる。

多量に大きな写真が扱われる特集ではページ数が増加し、また少数の小さい写真による構成による特集でのページ数は少量に収まる。そしてその写真の大きさは写真のページにおける印象を変える要因ともなる。見開きで1ページ以上の面積を占める写真は着目度や印象度が高く、細かい部分まで見えるため情報量が多い。反対に小さなサイズの写真は、文章や大きな写真との組み合わせ、または複数を並べて配置してあるなど補足的に使われ、大きな写真とは異なる情報を所持し、大きな写真とは別の効果を持たせることになる。

そこで対象写真について写真サイズによる分類した分析を行う。対象写真を図2に従い、P1、P2、P3、P4、P5の5分類にする。ここでP1は見開き2ページ分を占める写真とし、2ページ未満、1ページ以上の写真をP2、1ページ未満、1/2ページ以上の写真をP3、1/2ページ未満、1/4ページ以上の写真をP4、1/4ページ未満の写真をP5とする。

<p>P 1</p>  <p>2頁~3頁</p>	 	<p>P 2</p>  <p>1頁~2頁以上 2頁~3頁未満</p>	 
<p>P 3</p>  <p>1/2頁~3頁以上 1頁~2頁未満</p>	 	<p>P 4</p>  <p>1/4頁~3頁以上 1/2頁~2頁未満</p>	 
<p>P 5</p>  <p>1/4頁~3頁未満</p>	 	<p>参照:新建築 2000年10月号 p.168,p.184-185,1992年6月号 p.218-219,2000 年11月号 p.198-199,2001年4月号 p.164,2001 年5月号 p.109,1978年2月号 p.148,166,196,217,</p>	

図 3 写真サイズ凡例

表2は各年代における写真サイズ別の表である。さらに図3はそれらを枚数と割合のグラフにしたものである。

	p1	p2	p3	p4	p5	総数
70年代	25枚	595枚	541枚	614枚	1156枚	2931枚
80年代	28枚	437枚	692枚	794枚	1870枚	3821枚
90年代	35枚	135枚	128枚	159枚	542枚	999枚
2000年代	81枚	230枚	177枚	207枚	634枚	1329枚

表2 写真サイズ 年代別表

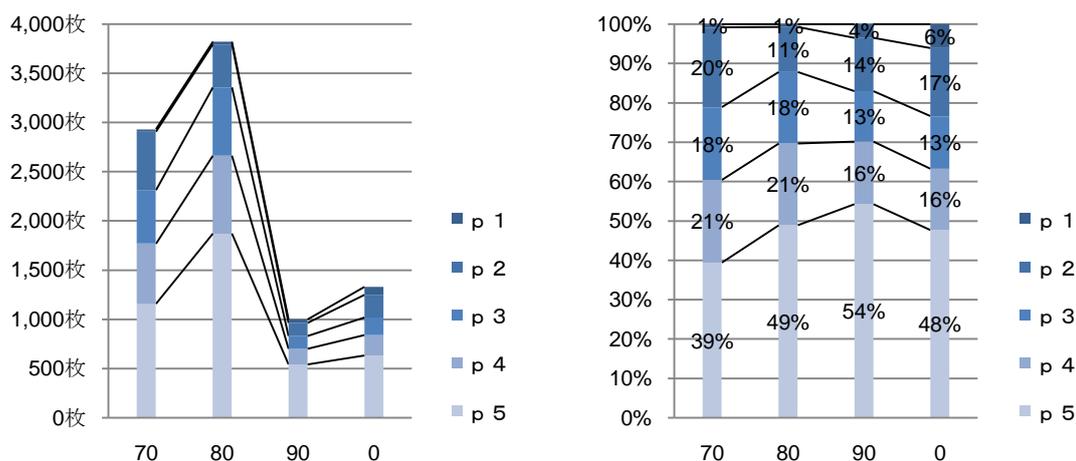


図4 写真サイズ別 枚数グラフ 枚数比率

図3の左のグラフは写真枚数を表すものである。そこから80年代3821枚、70年代2931枚、2000年代1329枚、90年代999枚の順に枚数が多いという結果がみられる。特集数は70年代が19特集、80年代が24特集、90年代が14特集、2000年代が24特集であることより、特集の多い年代が必ずしも写真が多いという結果ではないことがわかる。それらからも、90年代、2000年代は70、80年代に比べ写真数の少ない特集であるという結果が得られた。

図3の右のグラフは年代ごとの写真枚数比率を表すものである。P5の数は70年代で39%、80年代で49%、90年代で54%、2000年代で48%と、どの年代においても全体に対し占める割合が多いことがわかる。またP1の枚数が70年代の1%から2000年代の6%と、年ごとに増加していることが見て取れる。写真枚数からはサイズの小さい写真数が大きな割合を占めるという結果と、それらP3～P5を総じたものの割合は80年代以降減少する傾向にあることが見られた。

次に、各々の写真サイズに対しそれぞれの面積指標を出し、面積の割合から年代比較考察をする。各写真サイズ枚数に対しP1=200、P2=100、P3=50、P4=25、P5=10という誌面における面積割合に相似した係数を乗算し、それらから得られる値を面積指標とする。

図4は年代における各写真サイズの面積比率のグラフである。図3の枚数比率とは異なり、P2の面積比率が高いことがわかる。70年代が50%と最も高く、そのあとの2000年代、90年代、80年代の順の割合であるが、どの年代も40%に近く似た割合を示す。またP1の面積比率が年代を経るごとに上昇することが伺える。2000年代では27%の比率を占めし、結果として2000年代は大写真の比率が多い年代となっていることがわかる。90年代もP1が19%を占め、大写真の割合が高くなる要因のひとつとなっている。P3は80年代に一度28%まで増加し、その後減少している。P4も同様に80年代に増加しその後減少している。全体として大きな写真であるP1、P2の割合が増加し、P3～P5の小さな写真が減少する傾向がみられた。

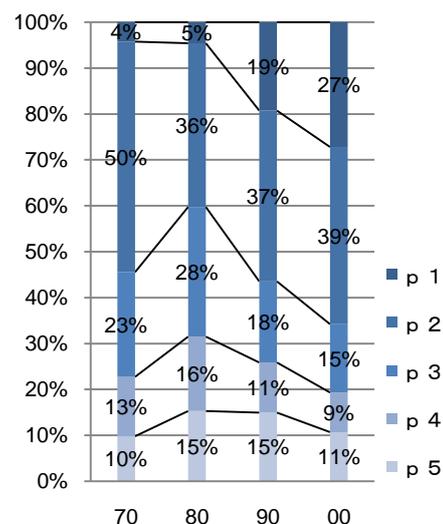


図5 写真サイズ別 面積比率グラフ

3.2.2 考察

一特集における平均写真枚数と合わせ考察する。70, 80年代は1ページ中に多数の写真が存在し、80年代には小さな写真が多く存在する。一方90, 2000年代においては、少数の大きな写真が存在し、誌面を構成していることが見られる。そのような大小の写真の使われ方に対し、

並べられた複数の写真は、読者に対して、この建築の見るべきところはすべてここに呈示されていると思わせる効果がある。また写真には大小があり、一枚ないしは数枚の写真がページ全体を使って掲載される。「つまり、この写真を見ていればこの建築を知っているということであり、これによって、一つの建物は一つの写真、一つのショットで代用されるようになるということである」(磯達雄. 2001. p. 78)

磯達雄は前記のように福屋粧子を引用^{xxiii}しながら建築写真における大小の写真による組み合わせの効果について述べる。また、建築雑誌では一つの建物の説明を複数の写真で構成する、「組み写真」の手法がとられている。組み写真の中で複数の写真の並べられ方によって建築

の見どころを誘導する呈示がなされていることも述べている^{xxiv}。

その組み写真の構成による視点の誘導は、組み写真を構成する要素となる個々の写真自体のイメージを変化させることになると考ええる。

70, 80年代のように1ページ内に多数の写真が存在するとき、ここでは複数の異なる写真が説明的に提示される。それによって読者は自らの表象の中でそれらのイメージを合成することで建築の全体像を再構築することとなる。それより、ここではそれぞれの写真を註解的イメージと呼ぶ。また、90, 2000年代のように大きな写真による少数構成では多数イメージの場合と比較して、読者はイメージを合成することなく、相互関連のない単独的な表象を形成する。それらの写真をここでは絵画的イメージと呼ぶことにする。つまり70年代から2000年代にかけて建築写真のイメージは註解的なものから絵画的なものへ変容したことが読み取れる。

1.8 フレーミング

3.3.1 分析方法・結果

建築空間はどの部分を見るかによって受ける印象が異なる。ある一点から一つの方向にある光景を切り取る作業を行う建築写真は、見る視点による印象の変化を顕著に感じさせる。建築写真のより1つの建築物から様々な光景が切り取られ、様々な印象を作り出す。建築にはインテリアとエクステリアが存在し、それらを同時に感じる視点はないために外観写真からは内観が想像をすることは難しく、またその逆でも同様のことが言える。さらに内観写真を見るとき、壁床天井すべてが写るものと、壁だけ写るものとはその写真伝えている要素が異なり、外観では全景と、壁面部分の写真でも印象が異なる。角度や写る要素の数や大きさや距離などにより写真は異なる印象を与える。建築写真はそれら多数の写真の組み合わせによって建築空間を説明している。そこで本論では建築空間を写真の枠で切り取る作業をフレーミング (framing) と呼び、対象写真のフレーミングのされ方による分類を行い考察する。

まず、対象写真を大きく内観・外観・ディテールの3分類する。内観は建築の内部を視点場とし撮影した写真、外観は外部より撮影されたもので、鳥瞰写真も外観写真に含める。建築の構成要素一部のみを写したものをディテール写真とする。それらの3分類のうち内観・外観をさらに細かく分類する。内観は壁床天井4方向が写るものを「内観全体」、その4面のいずれかが欠けるものを「内観部分」と分類し、外観は外形の輪郭がすべて写るものを「外観全体」とし、どこか一部が欠けて写るものを「外観部分」と分類し、全5分類とする。表3にフレーミング分析による結果を示す。

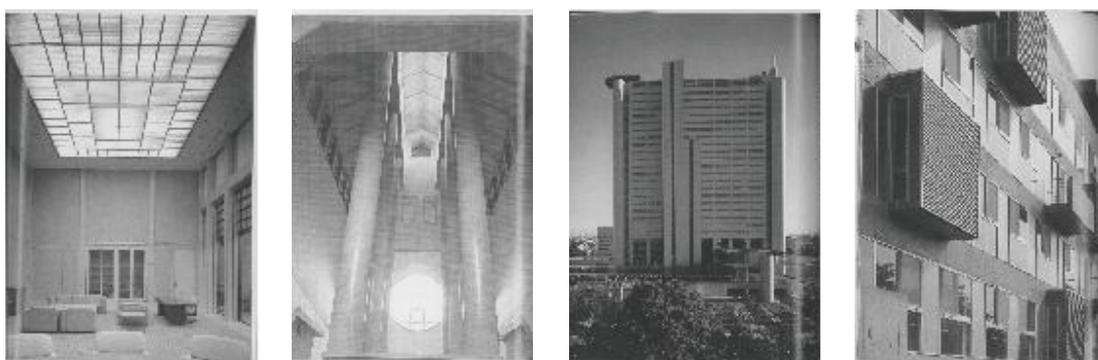


図 6 フレーミング写真凡例*

	内観全体	内観部分	外観全体	外観部分	ディテール	計
70年代	873枚	595枚	556枚	763枚	144枚	2931枚
80年代	1469枚	461枚	865枚	929枚	97枚	3821枚
90年代	306枚	101枚	217枚	289枚	86枚	999枚
2000年代	478枚	228枚	160枚	319枚	144枚	1329枚

表 3 フレーミング別写真枚数

図6は表3の結果から、一特集の写真総数で各項目を除外して求めた一特集あたりの平均写真枚数割合である。上から内観全体、内観部分、外観全体、外観部分、ディテールが該当する。70年代から2000年代への推移の中で特徴的な傾向として次の点をあげることができる。①内観写真において[全体:部分]比率は70年代から[3:2]、[3:1]、[3:1]、[2:1]とあり90年代以降、部分が比率上昇する。また、外観においての[全体:部分]比率においても70年代から[4:5]、[1:1]、[2:3]、[1:2]と部分比率が上がる結果が見られた。②外観部分写真が90年代で29%まで増加するが最終的には減少する。③内観部分写真は一度10%まで減少するが2000年代に再び増加する。④ディテール写真の総量が増加する。

図7は図4のように各写真に対し面積指標乗した値を利用したフレーミング別写真面積割合についてのグラフである。ディテールが一度増加するが減少していることがわかる。図6と比較するとディテールは小さい写真が増加したことが伺える。他の各項目においては図6の写真枚数割合グラフと相似していることがわかる。

3.3.2 考察

上記結果より、部分写真やディテール写真の割合が増加し全体写真割合が減少したという結果が得られた。

全体写真を撮る場合、建築写真の特性として被写体に対して正対して撮ることが多い。そのような写真は竣工写真の性質の影響であることが考えられる。

真正面から撮った写真群——。設計事務所がウェブサイトなどに載せるために撮る写真とは違い、竣工写真は「設計図のように正確な記録」であることが重視される。(日経アーキテクチュア編集部. 2006. p. 40)

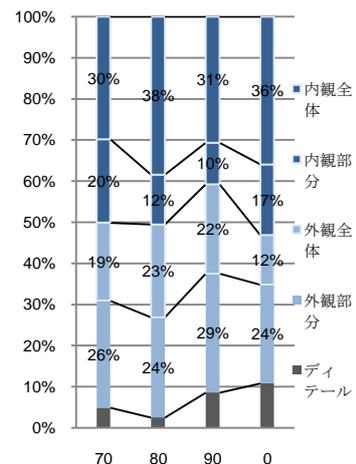


図7 年代別写真枚数割合

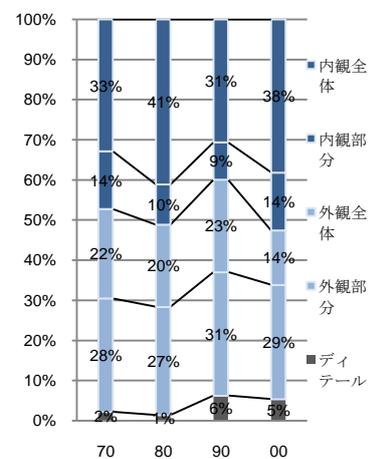


図7 年代別写真面積割合

つまり正対した全体写真には竣工写真のような正確な「記録性」があると考えられることができる。それは実際に見る視点の中ではあるひとつの特異点とされる。対して部分写真やディテール写真は、被写体に対し近づいた視点でかつ固定されていない自由な角度から撮る。それらの写真からは、記録のための正確性が存在しない代わりに、自由な角度からは「説明的ではない」設計者の意図しなかった部分の心地よさや驚き、物語を切り取られている^{xxv}ということ考察と結びつけると、部分写真の増加は設計において意図しなかった部分を映しだすイメージが増加したと考えることができる。

また、部分写真は距離において制限がないことに対し、全体写真においては被写体と一定の距離を要する。その距離の差に注目すると、部分写真では被写体に接近する撮影がなされることになり、その結果全体写真には写らない細かな様子が映し出される。

建築ディテールの関する歴史として、19世紀中ごろのイギリス建築が粗悪なディテールをもち、フランス建築のディテールが繊細なのは、当時のイギリスの雑誌『ビルダー』誌が木版を用いており、フランスの雑誌『レビュー・ジェネラル・ドゥ・ラーシテクチュール』が金属製版を用いていたことが影響すると述べられている^{xxvi}。部分写真・ディテール写真の増加より、建築の繊細な部分の表現が増加したことがいえ、それが建築に影響する要素となることが考えられる。

1.9 写真サイズとフレーミングによる年代分析

3.4.1 分析方法

各年代の写真面積総数をフレーミングにおいて分類したものに対してさらに写真サイズの種類をしたものについて分析を行い年代の推移をみる。このとき、ディテール写真は面積割合が他と比べ微小である為、分析対象外とする。

図8はフレーミング別平均面積割合のグラフ凡例である。円の頂点から左右に内観・外観に分け、上部に全体写真、下部に部分写真に分類する。さらに各項目において上から P1, P2 …とサイズの大きい順に細分する。ここでは、P1, P2 を誌面の強いイメージを形成する大写真、P3~P5 を小写真とし、その年代別の推移を見る。

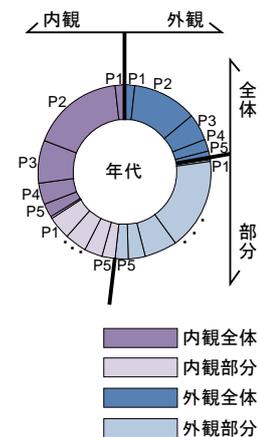


図 9 凡例

3.4.2 結果・考察

70年代は内観全体・外観全体・部分の大写真割合が約20%を占め、3項目がほぼ均等な誌面の着目度であると言える。80年代はどの項目においても大写真より小写真比率の方が高い。41%と最も面積割合を占め着目度の高い内観全体内でも、半数以上が小写真で構成されていることから、注解イメージによる内観の主張が伺える。90年代の内観全体・外観部分が31%を占めるが、大写真比率は外観部分の方が高い。2000年代では内観全体・外観部分の大写真割合が全体の25%と21%を占める。以上より、各年代においてフレーミングイメージの着目度は量と大きさにおいて変容することが伺える。また、表3の部分写真内における写真サイズ比率を見る。内外観において、90年代以降に大写真比率が増加していることが見て取れる。3.2.2①の部分写真の枚数比率増加の結果と合わせた考察をすると部分写真が絵画的イメージとして増加したことが考察できる。

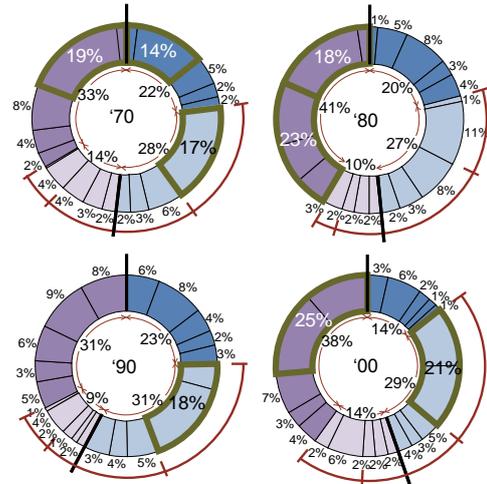


図10 年代別フレーミング写真サイズ割合

		内観					外観				
		P1	P2	P3	P4	P5	P1	P2	P3	P4	P5
'70	全体	2%	17%	8%	4%	2%	2%	12%	5%	2%	2%
		大写真：小写真=57:43					大写真：小写真=61:39				
	部分	0%	4%	4%	3%	2%	0%	17%	6%	3%	2%
'80	全体	2%	16%	11%	7%	5%	1%	5%	8%	3%	4%
		大写真：小写真=44:56					大写真：小写真=31:69				
	部分	0%	3%	2%	2%	2%	1%	11%	8%	4%	3%
'90	全体	8%	9%	6%	3%	5%	6%	8%	4%	2%	3%
		大写真：小写真=54:46					大写真：小写真=59:41				
	部分	1%	4%	2%	1%	2%	4%	14%	5%	3%	4%
'00	全体	11%	14%	7%	3%	4%	3%	6%	2%	1%	1%
		大写真：小写真=65:35					大写真：小写真=67:33				
	部分	2%	6%	2%	2%	2%	10%	11%	3%	2%	2%

表4 年代別フレーミング写真サイズ割合

また、『ポスト・モダニズムの建築言語』内に掲載される写真枚数は総計200枚であり、それらの枚数比率は[内観全体:内観部分:外観全体:外観部分:ディテール]=[15:10:120:45:10]であった。この結果より、ポスト・モダニズム期の建築写真は3/4が外観写真であり、そのうちの[全体:部分]=[8:3]であり、外観全体写真比率が高いことがわかる。

1.10 建築用途別比較

3.5.1 対象

建築用途は建築の規模や空間のスケール、形状などを決定するための要素のひとつである。そのため建築の特徴を表現するための媒体は、建築用途によって異なる表現になる可能性が考えられる。そこで、年代比較で見ると別の特質を抽出するために、建築用途という要素に着目し、それらの中における年代の特質分析を行う。

以下では特集タイトルに建築用途と判別でき、複数の建築が扱われている特集を対象とし、分析を行う。該当したものは36件であった。表3にタイトル名を記す。そのうち「住宅特集」は対象期間内の1986年に『新建築住宅特集』が創刊することにより途絶える特集である。よって18件の住宅特集（「住宅に見る建築家と社会の構図」、「いま、住宅の課題は？」「住宅特集<構造素材再考>」を含む）を分析対象外とするため、全18件が分析対象に該当する。

3.5.2 『新建築』における建築用途分類と「社会生活基本調査」における生活行動分類

新建築における建築用途の分類は、「居住施設（集合住宅・併用住宅・寮・別荘・その他）」「学校施設（保育園・幼稚園・小中高大学校・その他）」「事務所・庁舎」「商業施設」「研修施設」「福祉・厚生施設（養護施設・老人施設・デイサービス施設）」「医療施設（病院・診療所）」「研究施設・生産施設・工場」「交通施設・港湾施設・アーケード・流通施設・橋梁」「図書館・マルチメディアセンター」「美術館・博物館・資料館・水族館」「ギャラリー・展示施設・ショールーム」「アトリエ・書庫・車庫」「劇場・音楽ホール・多目的ホール・会議場・公会堂」「集会場・公民館・コミュニティセンター・文化ホール」「スポーツ施設」「宿泊・温泉施設」「宗教施設・斎場・墓碑」「公園施設・休憩所・広場・野外施設・仮設施設」「茶室」「博覧会」^{xxvii}の約20種類ある。

それらに対し、総務省統計局の行う「社会生活基本調査」に使用される生活行動の分類が相似し、建築用途に対応する。生活行動の分類は大分類として1次活動、2次活動、3次活動がある。1次活動は人間が生きていく上で生理的に必要な行動として「睡眠」「身の回りの用事」「食事」が該当、2次活動は各個人が家庭や社会の一員として行う義務的な行動として「通勤・通学」「仕事（収入を伴う仕事）」「学業（学生が

年・号	特集タイトル
7402	住宅特集
7408	住宅特集
7502	住宅特集
7503	集合住宅特集
7603	集合住宅特集
7609	住宅特集
7703	集合住宅・山荘特集
7708	住宅特集
7802	住宅特集
7807	集合住宅特集
7808	住宅特集
7810	集合住宅特集
7902	住宅特集
7908	住宅特集
8008	住宅に見る建築家と社会の構図
8104	いま、住宅の課題は？
8108	住宅特集
8109	コミュニティ建築
8202	住宅特集
8208	住宅特集
8302	住宅特集
8308	住宅特集<構造素材再考>
8402	住宅特集
8708	リゾート施設
8812	スモール・ビル10題
9010	ハイタッチ・リサーチパーク
9712	高齢社会のためのデザイン
0004	集住の可能性
0008	小さな公共建築
0010	オフィスはどこに向かうのか
0105	開かれる教育空間
0112	多様化・多機能化する学校
0202	医療福祉施設の現場から
0205	集合住宅／その供給形式とデザインの在り所
0306	学校建築
0309	集合住宅は変わるか

表5 建築用途内容を含む特集タイトル

学校の授業やそれに関連して行う学習活動)」「家事」「介護・看護」「育児」「買い物」が、3次活動は各個人の自由裁量時間に行う余暇活動として「移動(通勤・通学を除く)」「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」「休養・くつろぎ」「学習・研究(2次活動の「学業」以外)」「趣味・娯楽」「スポーツ」「ボランティア活動・社会参加活動」「交際・付き合い」「受信・療養」「その他」の約20項目が該当する。

これら建築用途を生活活動の分類に照らし合わせることで、建築用途は1次活動から3次活動の大分類に割り当てることができる。

そこで本論では建築用途分類をさらに生活行動分類にあてたものにおける考察を行う。

3.5.3 分析・考察

3.5.2の分類により、建築用途特集を1次活動から3次活動に分類する。すると、1次活動には8件該当し、すべてが「集合住宅特集」であった。3次活動は「リゾート施設」1件のみが該当し、残り10件が2次活動に該当した。よって、「集合住宅」「二次活動建築」の2種類の建築用途について分析を行う。分析

方法は3.4と同様に写真面積についてフレーミングと写真サイズにとって分類した項目の比較とする。表6は分類した結果の数値である。図10は図8の凡例をもとにした円グラフである。

	内観全体					外観全体				
	P1	P2	P3	P4	P5	P1	P2	P3	P4	P5
集`70	0%	7%	7%	4%	3%	1%	9%	5%	3%	2%
集`00	0%	9%	9%	6%	3%	0%	6%	3%	1%	1%
二`80.`90	0%	6%	10%	7%	9%	2%	5%	9%	3%	1%
二`00	17%	16%	8%	3%	5%	1%	5%	1%	1%	1%
	内観部分					外観部分				
	P1	P2	P3	P4	P5	P1	P2	P3	P4	P5
集`70	0%	1%	3%	3%	3%	1%	30%	9%	5%	4%
集`00	0%	6%	2%	3%	2%	18%	16%	5%	5%	6%
二`80.`90	0%	1%	1%	2%	3%	0%	20%	8%	6%	3%
二`00	2%	5%	2%	2%	3%	9%	10%	3%	1%	2%

表 6 建築用途別写真面積割合

集合住宅特集は70年代に3件、2000年代5件該当した。70年代、2000年代とも内観比率よりも外観比率が高い傾向が見られ、中でも部分写真割合が全体の約50%を占め、また大写真比率も高いことが見られる。両年代のグラフの形状が相似していることから、集合住宅特集は年代に関わらず外観部分のイメージが強い誌

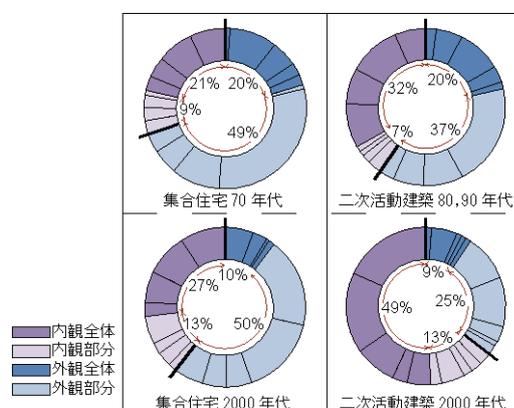


図 11 建築用途別面積割合グラフ

面構成であることが伺える。

二次活動建築は 80,90 年代を合せ 4 件、2000 年代に 6 件該当した。80,90 年代は外観部分割合が 37%を占め最も多く、2000 年代は内観全体割合が 49%の高比率を占める。二次活動建築特集は着目するフレーミングが外観から内観へと変容することが伺える。

以上、建築用途分類の結果から、3.4 の年代別分類との差異のある変化が得られることが確認でき、建築用途はフレーミングに影響を及ぼす要因の 1 つに挙げられると示唆できる。

結

以上の建築媒体の写真サイズとフレーミングの変容分析から、ポスト・モダニズム期から 2004 年までの間に『新建築』における写真について、

- 1) 註解的イメージから絵画的イメージへ推移していること。
- 2) 外観部分写真、ディテール写真へフレーミング対象が推移していること。
- 3) 用途毎に差を持って推移していること。

という知見を得た。これらは間接的に建築意匠設計の着目点の推移を示すものと考えられる。上記結果は、建築様式の変遷の事実と考え併せた時、現代建築を取り巻く伝達情報の変容と考え得るものである。

- i 五十嵐太郎. (1999). 情報・同時性・写真. 日本建築学会. 建築雑誌, vol.114 : 34-35
- ii 成実弘至. (2003). モードと身体. 角川学芸出版. p.213
- iii 小川英明, 言説分析におけるポスト・モダニズム建築観に関する一考察, 岐高専紀要, 第 28 号, 1993, p.19-26
- iv 新宮岳. 都市住宅に関する研究. 2004
- v 吉田義男. (1995) 刊行のことば. 新建築社. 新建築 1995 年 12 月臨時増刊創刊 70 周年記念号 現代の建築の軌跡, p.2
- vi 注 4 参照
- vii 岡河貢・足立真・坂本一成, ル・コルビュジェ全作品集における建築写真の対象と構成—情報化された建築空間の構成に関する研究—, 日本建築学会計画系論文集, 第 609 号, 2006, p.193-200
- viii 坂本一成・奥山信一, 建築誌・住宅誌での写真における住宅—建築イメージにかかわる枠組みの研究—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (北海道), 1986, p.865-866
- ix 新谷美和・貝島桃代, 建築雑誌に見る現代日本住宅における写真表現—写真と建築の関係—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (北陸), 2002, p.579-580
- x 平岩宏樹・坂牛卓, 建築意匠設計における建築雑誌の役割に関する研究—建築一般誌と建築専門誌の作品写真から読み取れる両氏の特質分析—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (北陸), 2006
- xi 川道麟太郎, ル・コルビュジェの言説における機械の隠喩の両義性, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 414 号, 1990, p.125-132
- ※¹ 磯達雄. (2001). 転移する建築写真—リアリズムからスーパーフラットまで. INAX 出版. p.77
- xiii 五十嵐太郎. (2001) メディアと建築—建築史の中の写真. INAX 出版. p.117
- xiii 前掲載. 注 1. P.117
- xiv 前掲載. 注 1. p.119
- xv 多木浩二.(2003). 写真論集成. 岩波書店 : p.283
- xvi 前掲載. 注 3. p.36
- xvii 前掲載. 注 4. p.341
- xviii 前掲載. 注 4. P.342
- ※² ロラン・バルト. (1985) 明るい部屋—写真についての覚書. (花輪光 訳) みすず書房. p.93-94
前掲載. 注 4. p.313
- ※³ ピアトリス・コロミーナ. (1996) マスメディアとしての近代建築—アドルフ・ロースとル・コルビュジェ. (松畑強 訳). p.90-91
- xix 前掲載. ※ 3. p.82-83
- xx 前掲載. 注 1. p.129
- xxi 前掲載. 注 1. p.129
- xxii 横山優子. (2006). もうひとつのまなざしを探して. エクスナレッジ. 建築写真 Architectural Photography. p.135
日経アーキテクチュア編集部. (2006). 「建築写真」をめぐる 15 の問い. 日経アーキテクチュア. 日経 B P 社. p.40
- xxiii 福屋粧子. 1998. 建築はどのように伝達されるか. 建築文化. 彰国社
- xxiv 前掲載. p.78
- ※新建築 1991 年 5 月号 p.249, 1976 年 9 月号 p.260, 2000 年 10 月号 P.167, 1997 年 12 月号 p.250
- xxv 前掲載. p.41
- xxvi 五十嵐太郎. 2006. 建築と写真が初めて遭遇するとき. エクスナレッジ. 建築写真 Architectural Photography. p.135
- xxvii 『新建築』毎月 12 月号に掲載される「新建築目次」参照. 年ごとにより若干異なる分類もあるために共通する項目を挙げる. 日経アーキテクチュア編集部. (2006). 「建築写真」をめぐる 15 の問い. 日経アーキテクチュア. 日経 B P 社. p.40
- xxvii 福屋粧子. 1998. 建築はどのように伝達されるか. 建築文化. 彰国社
- xxvii 前掲載. p.78
- ※新建築 1991 年 5 月号 p.249, 1976 年 9 月号 p.260, 2000 年 10 月号 P.167, 1997 年 12 月号 p.250
- xxvii 前掲載. p.41
- xxvii 五十嵐太郎. 2006. 建築と写真が初めて遭遇するとき. エクスナレッジ. 建築写真 Architectural Photography. p.135
- xxvii 『新建築』毎月 12 月号に掲載される「新建築目次」参照. 年ごとにより若干異なる分類もあるために共通する項目を挙げる.